

自由の発露としての英語学習

English Learning as a Liberating Experience

上 松 一*

Hajime UEMATSU

Abstract

実践的英語運用能力の重要性が強調され、授業も改良され始めてはいるが、日本の英語教育現場では未だに「正確に読んで訳す」ことが主流である。教師も学習者も、多くがこの固定観念の呪縛から解放されず、このことが往々にして学習者を萎縮させ、彼らをして「英語はつまらない。」と言わしめ、英語で意思疎通ができない学習者を量産し続けている結果に繋がっている。この否定的状況を打破するためには、教師は知識の伝達者として英語を「教える」ことを止め、学習者が自立して学習に取り組めるよう支援し、手助けする facilitator となる必要がある。その際、教師のみならず、学習者共々、英語をその本来の機能である意思疎通のための言語として尊重し、使用する必要がある。そうすることにより、学習者のみならず、教師自身も、英語の授業に喜びを見出し、自由を感じ、教師は自立した学習者の能力を信頼し、学習者は教師を信頼し、自らの能力を信頼する。これは教師にとっても、学習者にとっても、英語学習の喜びと自由の獲得へのチャレンジである。

Keywords: 'Learner Autonomy'; 「自由」; 「自立」; 'Facilitator'; 「英語は英語で」

1. はじめに

本稿は、2005年度前期に弘前大学で私が担当した「21世紀教育外国語コミュニケーション実習(英語B)」(主に1年生対象の共通教育)のwritingの授業で、受講生がどの程度英語で自由に自己表現ができたかを検証するために行った調査研究結果をまとめたものである。

日本の英語教育で頻繁に行われる writing の授業は、与えられた日本語の一文一文を正確に、文法、単語の綴り等に少しの間違ひもないように指導しながら英語に翻訳させるタイプものと、そうでなかったら、大学での授業に多いようだが、いわゆる paragraph writing タイプのもので、少しまとまった文章を如何に論理的に組み立てるかを指導するタイプの授業等が多いようである。前者の一番の弱点は、常日頃から一つの日本語に、ほとんどの場合、一つの英文を対応させ翻訳させることにより、学習者に「この日本語にはこの英文のみが正しい翻訳だ」というような間違った固定観念を植え付ける可能性が大きいということである。日本語で表現する場合を考えればすぐ分かるように、同じ事柄でも日本人が10人いれば10通りの表現の仕方があるわけで、英語教師は英語でもそのような柔軟性 flexibility を学習者が会得できるよう指導すべきである。特に、これから英語教師を目指す人はそれができることが不可欠である。その意味で、従来日本の中学・高校(大学でも?)で行われている writing の指導の仕方は考え直されるべきである。

後者の paragraph writing のような授業を行うことも重要であると考えられるが、そのような訓練が、まだ十分に自由に英語での自己表現ができない学習者に課されるとしたら、それはあまり意味がないも

* 弘前大学人文学部
Faculty of Humanities, Hirosaki University

のに終わるだろう。というのも、そこではなるほど文章を如何に組み立てるかという表面的な技術は教えられても、その技術を使いながら如何に創造的な文章を生み出すかは教えられないからである。そのような学習者個々人の創造性、ましてや外国語としての英語での創造性は、少なくとも自由に英語で自己表現をすることを十分に経験した後でないと生まれないであろう。

一文一文翻訳するタイプの授業にしても、paragraph writingのようなタイプの授業にしても、文法、単語の綴り等の間違いは、ほとんどの場合許されない。それらは極力排除されるのが通例であり、学習者は最初から完璧さ‘Get it right from the beginning’¹⁾を求められる。Accuracyに重きを置いたタイプの授業も必要だとは思われるし、その価値も認めるが、そのような極度の完璧さを学習者から終始求めるのは無理であり、賛成できない。それでは「魂のない」(というのは言い過ぎだろうか?)英語教育に墮する危険性が大いにある。英語教師が目指すべきは、外国語としての英語を使って、話したり、聞いたり、書いたり、読んだりすることが如何に楽しく、意義深いかを学習者に体得させることであり、そこに喜びと自由を感じさせるよう指導することであり、そこでは間違いも自由も認められるべきである。概して日本の英語教育では、言語習得のために極めて重要な訓練、つまり学習者個々人が持っているはずの考え・感情を、間違いを恐れることなく自由に表現させることをあまり行わない。どちらかという、学習者は間違いを逐一指摘されるので、英語を学ぶ本当の面白さを経験できないまま、間違いを犯すことだけを極端に恐れるようになり、ことばを使用する上で最も重要な柔軟性を学ぶ機会を奪われ続ける結果に終わっている。日本の学習者の多くが、何年も英語を勉強しても満足に英語で話せなかったり、自然でのびのびした英語を書けなかったりするのには、この辺に原因があるようだ。余りにも最初から「完璧さ」を求められ過ぎ、自由な自己表現をする経験をほとんど与えられないのだから、英語を使えるようにならないのは至極当然のことかも知れない。LightbownとSpadaは伝統的な英語の授業について以下のように述べている。

... students rarely use the language spontaneously. Teachers avoid letting beginning learners speak freely because this would allow them to make errors. The errors, it is said, could become habits. So it is better to prevent these bad habits before they happen.²⁾

上記引用文の中で、‘speak’を‘write’と置き換えると、同様のことが日本の英語教育におけるwritingの指導についても言える。私達は小学生・中学生の時に、日本語のレベルは稚拙で、諸々の日本語使用上の間違いを犯しながらも、それなりに自分の内なる考え・感情を自由に表現する機会を与えられたし、そのことが、日本語を習得する上で重要な要因となった。同様のことが、外国語としての英語を習得する際にも必要ではないだろうか。自由に語らせ、自由に書かせる。その際、少しくらい、否たくさん間違いを犯しても良いではないか。日本の多くの英語教師が目玉にするerrorsだが、実は‘Errors are a natural part of language learning. This is true of the development of a child’s first language as well as of second language learning by children and adults.’³⁾おとなでも子どもでも、完璧な日本語を話す日本人などいない。そもそも完璧なる日本語などあるのだろうか。では、母国語でもない外国語の学習でどうして最初から無理な完璧さを求めるのか。このことが、私が日本の英語教育に関して常々疑問に思っている点である。私たちは、‘Excessive feedback on error can have a negative effect on motivation’⁴⁾ということの真実をもう一度確認すべきである。

2. 授業の概要

私が担当したのはwritingの授業であったが、授業を全て英語で行うことで、speakingとlisteningの訓練、つまり口頭での意思疎通の訓練も同時に行い、できるだけall-roundな授業を行った。受講生にも極力英語で話させ、自分の思うことを英語で伝えるよう指導した。その際、英語使用上の間違いは避け

で通れないものであるだけでなく、むしろ間違ふことにより学んでいくことを十分(英語で)説明し、ほとんどの受講生の理解を得た。ただ、日本人にとって難しい英語の発音(/f/, /v/, / /, /ð/, /l/, /r/ 等)は、受講者間の意思疎通を円滑にするために、折に触れかなり徹底的に指導した。私の英語での説明・説得を十分理解していなかった受講生もいたようだったが、そういう受講生もとにかく良く耳を傾けて私の言うことを聞き、できるだけ理解しようと努めていたようだが、実はここに目的言語で授業を行うことの2つの重要な意義が潜んでいる。教師の英語が良く理解できない受講生は、理解できないがゆえに、理解しようとして普段よりもっと耳を済ませて聞き入る。そうすることが、その学習者の聞く練習になることは当然だが、それと同時に聞く態度も良くなるという副産物があり、それが一層その学習者の聴解力を高めるのに役立つのである。ほとんどの受講生は英語のみで90分近く持続的に話したり、作業をしたりするといった経験をしたことがなかったようだが、それでも私の意図するところを理解し、英語で話し始めた。授業では、毎時間、英語による pair/group discussion を十分行わせ、それに基づいて英語でそれぞれの考え・感ずるところを書いてもらった。教室での writing の訓練の他に、宿題としても書かせた。教室では、短い文章を何編か書く時もあり、また比較的長い文章を書く時もあったが、概して長短を含め数編書くのが常であった。書かれた文章は、受講生間で相互交換・相互批判をさせ、相互にコメントを記して返却するよう指示した。私は彼らにそれぞれの文章を複写させ、宿題と共にそれらも回収し、書かれている内容にコメントを付して次週に返却した。授業では、受講生を畏縮させないよう、英語の accuracy よりも、その fluency に重きをおき、それぞれが思うところを自由に語らせ、書かせた。また、英和・和英辞典等の bilingual dictionaries は教室内では使用不可とし、英英辞典を購入させ、英語を英語で理解し、説明する訓練の補助教材として使用した。

要するに、私の授業はいわゆる「英語漬け」の授業であり、私から日本語を介しての説明等は一切なく、受講生の間でも、どんなに拙くとも英語で意思疎通を行わせた。その意味で、私の授業は一種の English immersion course であると理解されたい。授業回数は15回、1回90分であった。

3. 使用したテキスト

テキストは以下の2冊を使った。

1. Grabbrielli, Richard, and Joel Harris. *WRITE about it TALK about it*. Fukuoka: Intercom Press, 1996, 1998.
2. *Cambridge Learner's Dictionary*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge UP, 2004.

最初に挙げたテキストがどのようなものであるかを理解できるように、その Introduction: 'Teacher Please Read This' と 'Student Please Read This' の双方から引用する。このテキストは 'an interactive writing textbook that asks students to express their opinions' (p. iii) で、著者が教えていた学生からの要望に答えるかたちで生まれた。

Many students have told us that the writing books they have used are boring. They have also said that they do not want to study grammar and structures as much as they want to express themselves in English, interacting with classmates. (p. iii)

このテキストは writing のテキストだが、'more opportunities to speak English' (p. iii) が組み込まれているため、私が目指していた授業に良く合致したものであった。授業では受講生は共同作業を行い、互いに助け合いながら学ぶこと 'helping each other learn' (p. iv) を頻繁に行うようデザインされており、そのことを通して、'They develop social skills by working together to create a healthy, non-threatening

climate built on trust and understanding.’ (p. iv) を目指したものである。これらのことから、このテキストは、文章を如何に組み立てるかというような、単なる表面的技術を伝授するものではないことは明らかである。付け加えると、このテキストには他の教材によく見受けられるいわゆる「教授用資料」なる「答え」は存在しない。このテキストを使って学習する学生には、‘relax and enjoy writing without worrying about grammar and spelling.’ (p. vi) とアドバイスし、‘communicate ... and share ideas with your classmates.’ (p. vi) と勇気づける。というのも、‘you will be able to learn so much from each other.’ (p. vi) であるからであり、‘the ideas come from you and your classmates, not from us [teachers]’ (p. vi) であると、学習者の autonomous で independent な学習、そしてそのように自立した個々人の共同作業による interdependent な学習の重要性を強調する。テキスト本体にはスペースが十分有り、受講生はテキストに直接書き込めるようになっている。

2 冊目は通常は辞書だが、これもテキストとして使用し、日本語を介さずに英語を英語のまま理解し、同時に英語を英語で説明する訓練の補助教材として、全ての受講生に購入してもらった。受講生の中には「英英辞典」monolingual English dictionaries というものの存在すら知らず、驚いていた学生もいたようであった。国語辞典は日本語版の monolingual dictionary であるから、ちょっと想像力を働かせればそれほど驚くことでもなかったのだが、日本の大多数の中学生・高校生、そして残念ながら、大学生、否英語教員までが、いわゆる英和辞典・和英辞典を使い続けているのは問題だと思う。それらを使い続ける理由としては、「英英辞典を引いても意味が良く分からない。」「書かれている意味の中に、また分からない単語が出てきて不便だ。」「理解しようとする時間がかり過ぎる。」等々がある。そして、「英和辞典・和英辞典を使えば、時間がかからず良く分かる。」という。英和辞典・和英辞典を使えば、時間がかからず良く分かるのは、日本人として当然のことである。「時間がかからず良く分かる」ということが、果たして英語習得上良いことなのか、そうでないのかについて語り始めると長くなるので、ここではこれ以上言及しないが、英語を本当に習得したい人に、「時間がかからず良く分かる」ことをこれ以上続けることは勧められない。もし、英語を習得することが一種のチャレンジだとすれば、いろいろなことでチャレンジし続けるべきではないだろうか。授業でチャレンジすることがないというのは、Lightbown と Spad がいうように、決して良いことではない。‘There will undoubtedly be a loss of motivation if students are not sufficiently challenged.’⁶⁾

4. 受講生

受講生は25人、その内農学生命科学部2人、人文学部3人、医学部・医学科11人、医学部・保健学科4人、教育学部2人、理工学部2人、中国人短期留学生1人であった。また、留学生を除き、20人は1年生、4人は2年生であった。「21世紀教育外国語コミュニケーション実習(英語)」は学生の英語能力によりクラス分けをする Grade 制を採用しており、入学前の英語センター試験の結果によって受講生を振り分ける。私の担当した「英語 B」の1年生受講生は、英語センター試験の結果がトップクラスの学生だった。4人の2年生は、前年度に「英語 B」を優秀な成績(100点満点中80点以上)で修得し、ひとつ上のレベルで英語の学習を続けていた学生であった。なお、中国人留学生は、私が直接英語で面接し、受講を許可した。中国人留学生はかなり流暢に英語が話せた。彼女によると、英語は日本人と同じように母国の公立学校で習っただけで、何も特別なことはしなかったとのことだった。それに比べて日本人学生の口頭での意思疎通能力は概して低かった。

5. アンケート調査結果の分析

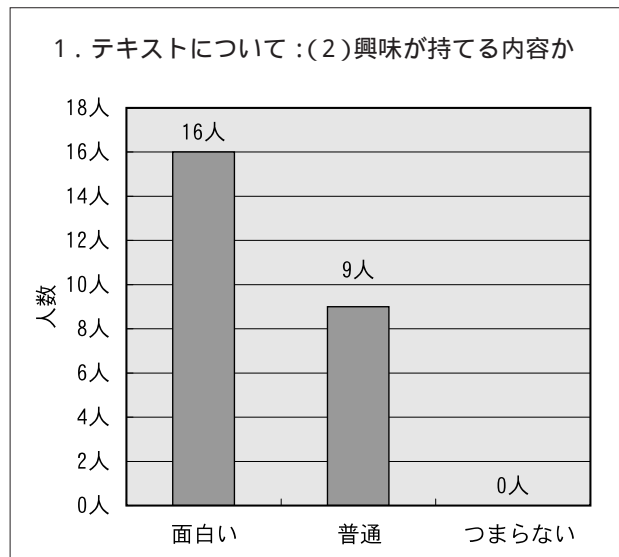
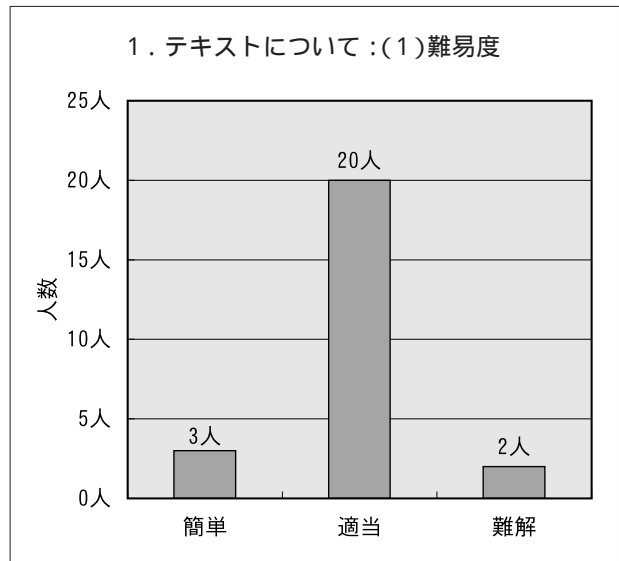
最終授業の際、私の授業に対する受講生の意見を聞くため、無記名のアンケート調査を行った(「参考資料: 調査用紙」参照)。この調査は独自に行われたものであり、大学当局が行ったアンケート調査とは別である。最後の授業の際に実施したので、回収率は100%であった。誰がどの用紙に記入したかが

らないように、留意して回収した。

質問1(1)で「テキストについて」、その「難易度」を尋ねた。20人の受講生が「適当」と答え、「簡単」3人、及び「難解」2人を大きく上回った。また、質問1(2)で、テキストは「興味を持てる内容か」どうかを尋ねたところ、「面白い」が16人、「普通」が9人で、「つまらない」と答えた受講生はいなかった。これらの結果から、テキストの選択はかなり妥当だったものと思われる。(2)で、「面白い」と答えた受講生に、「(3)特に何が面白かったか」尋ねたところ、以下のような様々な興味深い回答があった。

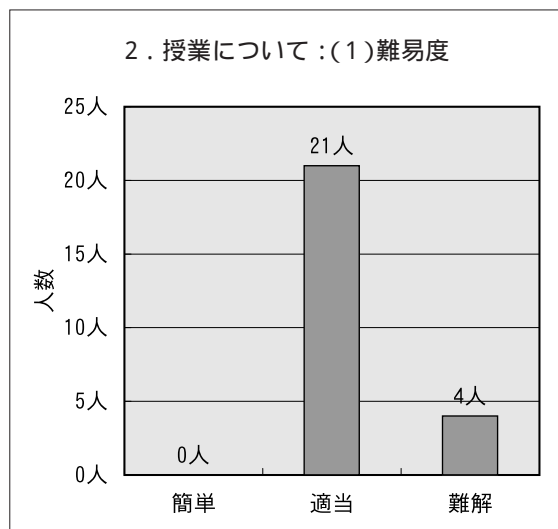
- ・「タクシードライバーになった自分のことを書くこと。」
- ・「いろいろな人と、英語で話し合ったり、物語を考えたりして面白かった。」
- ・「様々な状況においての会話を想像して英作文をした事。」
- ・「いろいろな人としゃべれた。」
- ・「色々な人と交流できる様な内容がおもしろかった。授業時間がとても短く感じられるほどだった。」
- ・「心理テストが含まれていたり、エッセイを自分で作るなど、興味を持って取り組むことができた。」
- ・「今まで使っていたテキストと違い、自分の意見を書けるので楽しかった。」
- ・「自由に記述できて、クラスの人と意見交換などができたから。」
- ・「動物を使った心理テスト。」
- ・「テキストの課題などにそって、同じクラスの人たちと英語で考えを述べたりするところ。」
- ・「毎回、英英辞典から、問題の受け答え、グループでの活動。」
- ・「具体的には挙げられませんが、どの課も、『1人1人の個性』を大事にしてくれているところ。」
- ・「ゲームのような感じで楽しめた。」
- ・「自分の好きな様に文章を書けるところ。」
- ・「普段考えないようなことを真剣に考えることができたから。」
- ・「自分の意見をかいて話し合うこと。自分のことなどを英語にしたのは良かった。」

これらの意見には総体として、私たち教師が望むべきものの全てが凝縮して述べられていないだろうか。7人の受講生がそれぞれ別々の表現で、いろいろな人と英語で話し合い、一緒に学ぶことの喜びを述べている。Littleの云う、‘in formal educational contexts as elsewhere learning can proceed only via interaction’⁷⁾、或いは使用したwritingのテキストの筆者のことばにある、‘Cooperation is fundamental to human nature.’⁸⁾を、受講生が実際に体験できたことは教師としてたいへん喜ばしいことであった。



上記の受講生の意見を注意深く読み返すと、他にもいろいろな点に気が付く。それぞれ「真剣」に、自分で考え、話し合い、その中で自分自身のことを振り返り、自分自身について語り、また自分の意見を述べ、「自分のこと」や「自分の意見」を「自分の好きな様」に「自由に記述でき」ることを楽しみ、学ぶ喜びを確実に感じ取っている受講生の姿が窺える。3番目の受講生が述べている「想像」力が、将来「創造力」に進化しないと誰が言えるだろうか。一人の受講生は、授業が楽しくて「授業時間がとても短く感じられるほどだった。」と述べているが、これは教師冥利に尽きる。これらの肯定的反応は、一人の受講生のことばにある「どの課も、『1人1人の個性』を大事にしてくれている」テキストに因るところが大であった。これら全てのことが、英語を介して行われたのである。何れにせよ、間違いなど恐れずに、これまで蓄積してきた自分たちの英語力で十分(否不十分ながらも?)意思疎通ができ、また自分の思うこと・考えることを十分書き表すことができたという経験が彼らにある程度の自信を与えることができたとすれば幸いである。

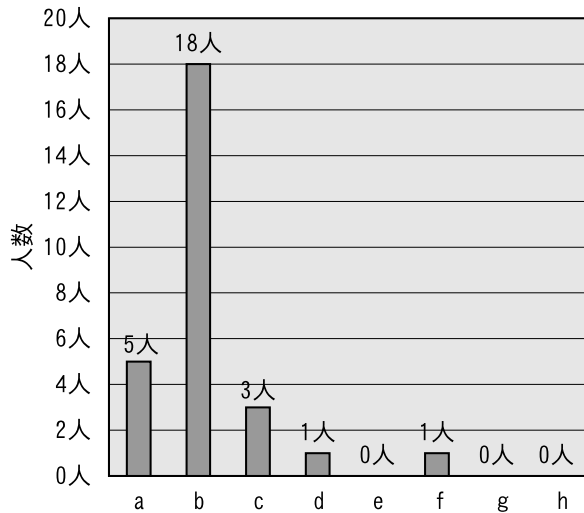
質問2(1)で、全てを英語で行った授業全体の「難易度」を尋ねた。21人が「適当」と答え、「難解」は4人、「簡単」は0人だった。「簡単」と答える受講生がいないだろうことは予想できた。今まで、全部英語での授業などというものはあまり受けたことが無かっただろうし、また、せっかく何かを学ぼうとするのだから、全部分かって簡単、では最初から行う意味がない。何事もチャレンジすること無しには上達しない。教える側の教師からすれば、90分という授業時間を全て有効に使うべきで、英語の教師が英語で話すことで受講生に直に「聞き取り」の練習を与えることができるのであれば、これに越したことはない。テキストに付属したカセットテープやCDを使っ



聞き取りの練習ではないはずだ。英語での授業が「難解」と思う受講生は必ず何人かはいる。そのような受講生には、*'If you don't understand what I'm saying, just listen to me really carefully. If you do that, you'll gradually be able to understand me better. You can learn listening only by listening.'*とアドバイスする。KowalとSwainが言うように、*'one learns to read by reading and to write by writing...one learns to speak by speaking.'*⁹⁾であり、同じことはlisteningにも言えるだろう。

質問2(2)「英語だけでの授業は」で、授業についてどう思ったかを尋ねた。結果は興味深いものだった。この質問は「複数選択可」であり、「a. 非常にためになるので続けて欲しい」が5人、「b. 時々分からないが、ためになるので続けて欲しい」が18人、「c. 半分くらい分からないが、ためになるので続けて欲しい」が3人、「d. ほとんど分からないが、ためになるので続けて欲しい」が1人であった。反対に、「e. 半分くらい分からないので、止めて欲しい」が0人、「f. ほとんど分からないので、止めて欲しい」が1人だった。a、b、c、dを選択した受講生は、それぞれの理解の程度にかかわらず、「ためになるので続けて欲しい」と答えていて、延べ人数で27人いた。その反対に、e、fの「止めて欲しい」と思っていた受講生は1人だった。受講生全体は25人で、その内3人がaとbの2つを選択していたので、全体の延べ人数が28人となるわけで、その3人の重複分を差し引くと、24人が「ためになるので続けて欲しい」を選択し、1人が「止めて欲しい」を選択したことになる。これらをグラフに表すと、実に96%もの受講生が英語は英語で教えて欲しいと願っていることが分かる。半期15回の比較的短い間の授業ではあったが、英語は英語で教えられた方がより効果的だと、多くの私の受講生は自らの体験に基づいて判断したのである。

2. 授業について : (2) 英語だけの授業は (複数選択可)

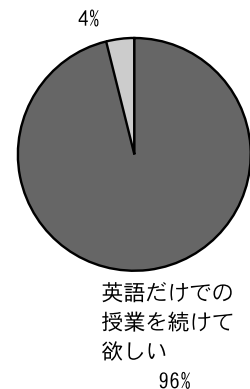


- a. 非常にためになるので続けて欲しい
- b. 時々分からないが、ためになるので続けて欲しい
- c. 半分くらい分からないが、ためになるので続けて欲しい
- d. ほとんど分からないが、ためになるので続けて欲しい
- e. 半分くらい分からないので、止めて欲しい
- f. ほとんど分からないので、止めて欲しい
- g. 先生の英語は難しすぎて、面白くない
- h. 先生の英語は簡単すぎて、面白くない

ここで注目すべきことが3点ある。1点目は、質問2(1)「難易度」と関連する。私の英語での授業を「難解」だと思った受講生が4人いたが、その内の3人は質問2(2)「英語だけの授業は」では、2人が「b. 時々分からないが、ためになるので続けて欲しい」を選択し、1人が、「d. ほとんど分からないが、ためになるので続けて欲しい」を選択している。「難解」と判断する基準はそれぞれの受講生で違うようだが、それにしてもこの結果は示唆的である。英語教師の間でよく交わされる会話に、「英語を使って教えても生徒・学生は分からない」云々がある。ここでのサンプル数は少ないのであまり断定的なことは言えないが、学習者が「分からない」ことが、即英語を英語で教えないことの正当な理由とはならないかも知れないということである。むしろ、質問2の(1)と(2)から推測できることは、学習者は教師の話す英語が分からないからこそ、分かってと努力して聞き、余計に耳を澄まして聞こうとするのではないかということである。「難解」と思う学習者も、教師からもっと英語を聞きたいのではないか。今、分からないからこそ余計に耳を澄まして聞こうとするのではないか、と書いたが、このことは、別の機会に私が行ったアンケート調査で多くの学生が述べていたことだ。「英語を使って教えても生徒・学生は分からない」から英語を使って教えても無駄だというのはむしろ反対で、「分からないからこそ、分かってとして良く聞くように努力する」し、「英語を英語で教えられと、聞く態度が身に付く」というのが実相であろう。英語を英語で教える大きな利点はこのにある。学習者は良く聞こうとするので、聞く態度が養われ、その態度が彼らの実際の聞く力を上達させる。英語教師が「英語を使って教えても無駄だ」という態度をとり続けるならば、学習者の聞く態度は養えないし、彼らの聞く力も伸びない。前者はvirtuous circleで、後者はvicious circleということになり、学習者の英語力を養うにはどちらが有効かは火を見るよりも明らかである。英語を英語で教え、教えられことは、英語教師にとっても、学習者にとってもチャレンジであり、このチャレンジがお互いを高めるといえるのではないだろうか。

注目すべき2点目は、5人の受講生が「a. 非常にためになるので、続けて欲しい」と極めて積極的に英語だけでの授業を望んでいるという事実だ。5人というのは全体の20%で、少ないように思うかも知れないが、決してそのようなことはない。あえて言うならば、彼らはいわゆる significant minority で、

英語だけでの
授業は止めて
欲しい



彼らの存在が25人のクラス全体を引っ張っていった原動力でもあった。

3点目は、2人の受講生がそれぞれdとfを選択したことだ。この2人は、先ほどの英語だけの授業の「難易度」の質問で「難解」と答えた4人の内の2人である。2人とも「ほとんど分からない」という点では共通していたが、そのうちの1人は、「...が、ためになるので続けて欲しい」と、積極的な態度を示したのは先ほど見た。これに対して、もう一方の受講生は「...ので、止めて欲しい」と、消極的だった。いうならば2人は今同じ出発点にいて、前者はその積極性を維持し続けさえすればいずれ英語の能力が伸びるだろうし、後者は気持ちを切り替えない限りそうはならないだろうということが予測される。後者のような受講生が1人でもいたことにもっと早く気が付いていれば、その受講生と個別に話をするなどして(in English, of course!)もう少し手助けできたかも知れなかったのにと、私自身の迂闊さを今悔いるばかりである。

質問2(2)での他の2つの選択肢「g. 先生の英語は難しすぎて、面白くない」と「h. 先生の英語は簡単すぎて、面白くない」は誰も選ばなかった。私の英語での話のレベルは受講生の英語力に鑑みて概ね適当であって、内容も面白くなくはなかったということだろうか。いずれにせよ、私のほとんどの受講生が持っていたかも知れない固定観念、つまり英語の授業とは「読んで訳す」ことだという固定観念を少しでも壊すことができたのであれば幸いである。

質問9では、「この授業の良い点(自由記述)」を尋ねた。この質問に対しては25人全員が答え、回答は以下の通りだった。

- ・「Speaking, listening, writing が並行して学べる点。」
- ・「テキストも先生も本当に個人を大事にしてくれ、どんな表現をしても『間違い』ではない点。書く力が本当にのびたと思う。とても充実していた。」
- ・「今まで、英語の授業が楽しいと感じたことはなかったが、この授業は楽しかったし、いかに自分が知っている英語から自分が言いたい文をつくるかを学ぶことができたと思う。」
- ・「高校の時までは、文法・重要単語など、英語を学問としてしか見れなかったけれど、この授業では英語を言語としてコミュニケーションができた所が自分にとって良かった点だと思う。『間違えたらどうしよう』とかそのような事を考えなかった分、自分をより表現できた。英英辞典は初めて使ったが、英 英で説明した時の意味から単語を当てるクイズも語い力がついて良かった。」
- ・「英語を使ったgroup workが多く、英語を話す機会が多かった。楽しんで英文を書くことができた。」
- ・「いろいろな人と交流を持てるところと、本当に自由に英文が書けるところ。」
- ・「大学の英語の授業らしく全て英語で行われるので緊張感をもちながら臨める。グループワークがあるので、英語で自分の意思をなんとか伝えようと努力できる。」
- ・「全て英語なので、始めはとまどったこともあったが、英語を聞いたり話したりできるようになるためにはそれが一番いい方法だと思う。」
- ・「英語でしか話せないという制約があるが、そのような制約が課されることは日常生活ではない。英語で話すいい機会となった。」
- ・「今まできちんと発音練習をしたことがなかったので、今回の授業で発音を教えてもらえてよかった。」
- ・「様々な学部の人と話せる。英語で話せる場であること。」
- ・「いろいろな学部の人と話す機会が非常に多い」
- ・「教官が英語で授業を進めるので、英語を聴く力が上達した。また、英語の話し方がわかった。」
- ・「いやでも英語をきかなければいけないのでリスニングが上達した気がする。」
- ・「先生が全て英語で話すので、とても良い訓練になった。」
- ・「原則日本語を使わないで授業を進める点。」
- ・「他の授業より英語にふれることができるので、英語の学習としてはかなり役に立った。」

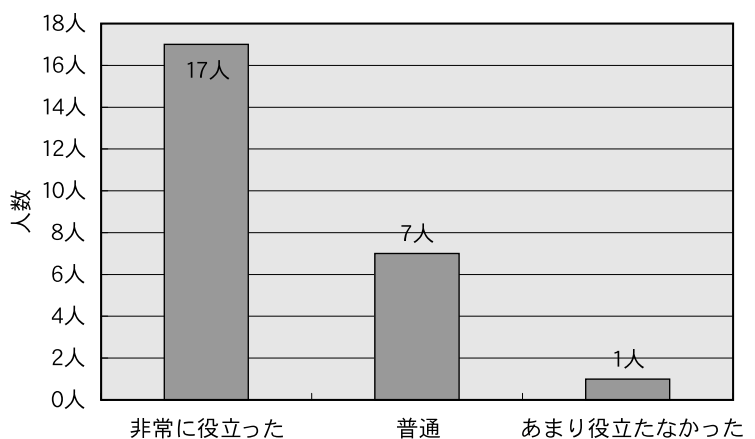
- ・「ずっと英語で話しているので、英語に耳がなれていく。いろいろな人とコミュニケーションがとれる。」
- ・「終始英語だけで授業が進むのでどうしたらいいかわからないときがあったが、英語を使うことに
対して抵抗感が少しずつなくなってきたと思う。」
- ・「先生が私達に分かりやすいやさしい英語で話してくれたことです。最初からハイレベルな英語で
つっぱねられたら、おそらくざせつしたことでしょう。」
- ・「英英辞典を使った点。言葉の翻訳意味だけ重視することから、その言葉の本当の意味に気づくこ
とになり、母語の単語の意味も考えることになった。」
- ・「今まで受けてきた授業と違って、とにかくかたくなるしくなく、自由であった点。だから眠くなるこ
とがなかったし、そこもよかった。」
- ・「テキストの内容が面白いので飽きない。」
- ・「テキストをやることで他人の意見をきけること。」
- ・「友達がたくさんできる所。」

これらの回答から、英語を英語で教え・学ぶことには諸々の利点があることが分かる。英語に慣れていない受講生が英語で教えられると、言われていることを理解しようと努めるので、日本語で教えられ
るよりもっと「緊張感」を持って聞き、「眠くなる」ことがなくなる。その結果、「いやでも」「英語に耳
がなれていく」し、英語での「コミュニケーションがとれる」ようになる。また、そのような授業を聞
き続けることで、「英語を使うことに対して抵抗感が」なくなり、「英語の話し方がわかつて来て、「英
語で自分の意思をなんとか伝えようと努力」する。その結果、「自分が知っている英語から自分が言
いたい文をつく」ことが十分できるという重要なことに気が付く。2人の受講生が英語だけでの授業に
対する戸惑いを述べているが、彼らでさえ英語を英語で教え・学ぶことの有効性をそれなりに感じ
ているのが窺える。

受講生が犯す英語使用の際の諸々の間違いを責めるのではなく、許容することにも多大なる効果があ
る。間違いを犯すことは必然的で、言語習得上必要なプロセスだと受講生に納得させ、自由に英語で
interactionをさせたことが、「『間違えたらどうしよう』とかそのような事を考えなかった分、自分をよ
り表現できた」ということを可能にし、彼らをして、教師が「個人を大事にしてくれ、どんな表現をして
も」良いと安心させる効果があった。そのような安心感がクラスの「自由」で、「かたくなるしくな」い開
放的雰囲気を出すのに効果があり、それが彼らの学ぶ意欲を掻き立てる。一旦このような学習環境
が確立されると、たくさん間違いを犯しているのにもかかわらず、受講生は不思議な「充実感」を味わい、
「書く力が本当にのび」、「自分をより表現でき」、「自由に英文を書くことができ」、「楽しんで英文を書
くことができ」ようになる。受講
生の英語能力が、間違いを犯しながらも、確実に上達しているという、
この一見逆説的に思える状況は重要
である。

上記の受講生の意見から、個々人の思い・考えを自由に話し合える英語でのpair work/group workにも注
目すべき効果があることが分かる。質問6(1)で、「Pair work/group workは」「Speaking/listeningの練習に」
どの程度役に立ったかを尋ねた。結果は、「非常に役立った」が17人、

6. Pair work/group workは：(1) Speaking/listeningの練習に



「普通」が7人、「あまり役立たなかった」が1人であった。また、質問6(2)で、「Pair work/group workは」「楽しかったか」どうかを尋ねた。結果は、「非常に楽しかった」が18人、「普通」が4人、「あまり楽しくなかった」が3人であった。どちらの質問でも2/3強の受講生がpair work/group workは「非常に」役立ち、「非常に」楽しかったと回答した。個々人の思い・考えを自由に話し合える英語でのpair work/group workは、英語での反復ドリル練習、或いは作

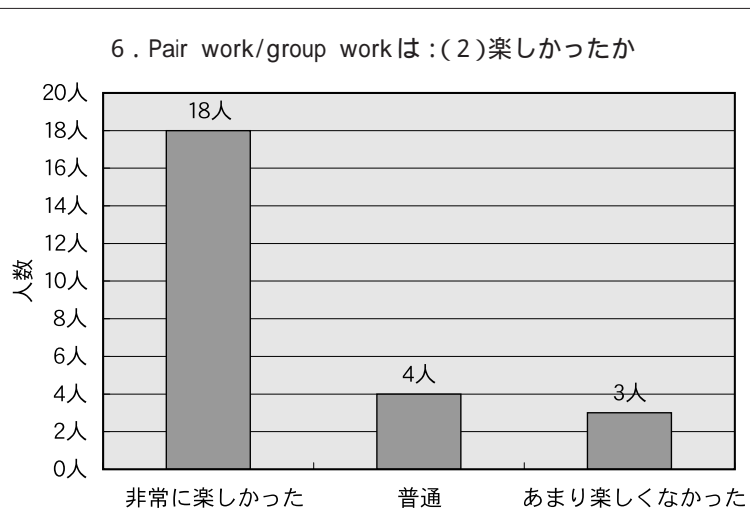
られた偽物の会話にはない、赤裸々で意味のある「英語を話す機会」を増やし、「英語にふれ」、「英語で話せる場」を提供する。また、そのような活動を通して、受講生は「いろいろな人と交流をもて」、「他人の意見をきける」という、教育の場に本来あるべき極めて重要な体験ができる場を得る。結果として彼らのクラスは「友達がたくさんできる所」となり、翻って、そのことがクラスをより学習し易い場にする。

3人の受講生が、私のクラスでの経験を彼らの今までの英語学習経験と比較している。その内の1人は、「今まで、英語の授業が楽しいと感じたことはなかったが、この授業は楽しかった」と言い、他の2人はそれぞれ、「高校の時までは、文法・重要単語など、英語を学問としてしか見れなかったけれど、この授業では英語を言語としてコミュニケーションができた所が自分にとって良かった」と言い、また、「大学の英語の授業らし」といっている。大学の英語の授業らしいかどうかは分からないが、前にも述べたように、英語の授業とは「読んで訳す」ことだという彼らの固定観念に対して、そうではない学習の仕方也可能だと知らしめることができたのなら私の授業にも意味があったと思う。

一人の受講生が、私の授業のよい点として、「先生が私達に分かりやすいやさしい英語で話してくれたことです。最初からハイレベルな英語で突っぱねられたら、おそらく挫折したことでしょう。」と述べているが、受講生に英語を使用する際の柔軟性を求めるためには、まず教師が柔軟でなければならならず、そのためには教師側での工夫が必要となる。

質問10では、「この授業の悪い点(自由記述)」を尋ねた。この質問に対しては21人が以下のように回答した。

- ・「本当に英語だけだと、たまに内容が伝わらない。」
- ・「英語だけでの授業であったので、かなりとまどった。」
- ・「今まで英語で話したことがなかったので、いきなり英語で会話するのは無理だった。」
- ・「人により英語へのモチベーションが異なり、英語で話せる人と、話せない人がいたと思う。」
- ・「全て英語で会話するので、何を言っているかわからなかったり、自分で言いたいことを言えなかったりする。」
- ・「連絡事項も英語なので何を言っているのか分からない時もあった。重要なところは黒板に書いておけばいいと思う。」
- ・「非常に楽しかったのですが、英語の B のレベルとしては、もう少し難しくした方がいいかもしれません。私にとっては今のレベルがちょうど良かったのですが...。」
- ・「英文を読むことが少なかったので読む力をつけるにはものたりない授業だった。」
- ・「自由な部分が大きいために、正確な英語を書く力は落ちたと思う。」



- ・「英英で、理解できない単語があり、覚えられなかった。」
- ・「英英辞典がやりっぱなしになっている。」
- ・「辞書が重い事(木曜日は特に荷物が多いので)。」
- ・「楽しすぎる。」
- ・「学生の積極性がないところ。自分もダメだと思った。他に問題はないと思う。」
- ・「学生の活発性がないため、授業の目的と従わなくてうまく行かなかった。」
- ・「みんなが保守的で消極的に英語を話していたこと。さらにおもしろくて、分かりやすいトピックがあれば、もっとみんな積極的に英語で会話できたのではないか。(難しくて、言い換えれない単語があれば調べて良い、など...も許して。)」
- ・「グループ作りがスムーズに行かない点」
- ・「親しくない人と仲良くなれるのはいいが、親しい人とほとんど組めないで終わったのが残念。」
- ・「Group workでさえ話せば、誰とどのように組んでも問題はないと思います。」
- ・「人見知りしやすいので、グループを作るのにいつも同じ人と組んでしまうので、先生に決めてほしいです。」
- ・「特になし。」

これらの意見から窺える私の授業の問題点は、大きく分けて5つあるようだ。1点目は口頭での意思疎通の難しさに関して、2点目は授業の内容に関して、3点目は学生の受講態度に関して、4点目はpair work/group workの際のグループ分けに関して、5点目は英英辞典を使用した練習に関して、である。1点目に関しては、既に見た質問2(2)「英語だけの授業は」の結果が示していたように、それぞれの理解度に差はあるものの人数にして25人中24人、率にして96%もの受講生が英語は英語で教えて欲しいと願っていることから、今現在受講生にとって難しいことであっても英語は英語で教えることを続けるべきであると思う。意思疎通の難しさは「この授業の悪い点」と解釈するよりも、むしろ英語を習得する際に避けては通れないチャレンジと見る方が妥当であろう。

2点目の授業の内容に関しては、まず「英語の Bのレベルとしては、もう少し難しくした方がいいかもしれ」ないという意見があった。この意見を寄せた本人自身は、「私にとっては今のレベルがちょうど良かったのですが...。」と付け加えていることから分かるように、もし授業をもう少し難しくしていたならば、この受講生は授業について来れなかったかも知れないし、それほど「楽し」めなかったかも知れない。因みにこの受講生は、質問2(2)の「その他の意見」で、英語だけでの授業は「very interesting!」と述べている。他の受講生は、「英文を読むことが少なかったので読む力をつけるにはものたりない授業だった。」と英語学習に意欲的な意見を述べているが、私の担当した授業はもともとwritingの授業だった。もう1人の受講生は、「自由な部分が大きいために、正確な英語を書く力は落ちたと思う。」と述べている。もっともな意見だと思う。ただ、前述したように、私の今回の授業の目的は、受講生が間違いをあまり気にせず、自分の考えるところを英語で自由に語り・表現することにあった。結局、外国語習得で重要なのはfluencyとaccuracyの両方をどうバランスよく獲得していくかということであろう。今回は、恐らく大半の受講生はあまり経験したことがなかったであろう、前者の訓練に重きを置いた授業を行ったわけで、この受講生自身、「今まで受けてきた授業と違って、とにかくかたくなしくなく、自由であった点。だから眠くなることがなかったし、そこもよかった。」ことを、授業の良かった点として述べている。4人目の受講生は、「さらにおもしろくて、分かりやすいトピックがあれば、もっとみんな積極的に英語で会話できたのではないか。」と、教師の側での更なる工夫の必要性を訴えている。

3点目の学生の受講態度に関しては、3人の受講生が、「学生の積極性がないところ。自分もダメだと思った。」「学生の活発性がない」「みんなが保守的で消極的」と述べ、自分ら自身の消極的な受講態度について自己反省している。ただ、そのことを自覚していたことは評価したい。教師としての私も、も

う少し工夫し、彼らがもっと積極的になれるよう支援すべきであった。

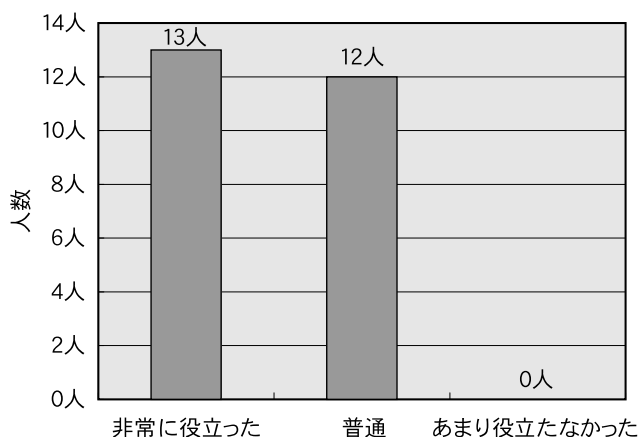
4点目のpair work/group workの際のグループ分けに関しては、上記3点目と同じように、受講生の消極的な態度と共に、私の力不足で、時としてグループ分けに時間がかかった点への批判である。この点は更に工夫し、改善したい。

5点目の英英辞典を使用した練習に関しては、批判は謙虚に受け止めたい。ただ、このような批判的な意見を述べた受講生も英英辞典使用そのものに関しては概して好意的だった。質問7「英英辞典を使った練習は:(1)役立ったか」に対して、13人が「非常に役立った」と答え、「普通」が12人、「あまり役立たなかった」は0人だった。質問7(2)「楽しかったか」では、17人が「非常に楽しかった」と回答し、「普通」が8人、「あまり楽しくなかった」は0人だった。質問8で、「英英辞典をこれからも使い続けるか」と尋ねたところ、18人が「はい」と答え、「分からない」が5人、「無回答」が2人で、「いいえ」は0人だった。英語を英語で考え、説明する訓練の補助教材として使用した英英辞典は概ねその役割を果たしたようだった。

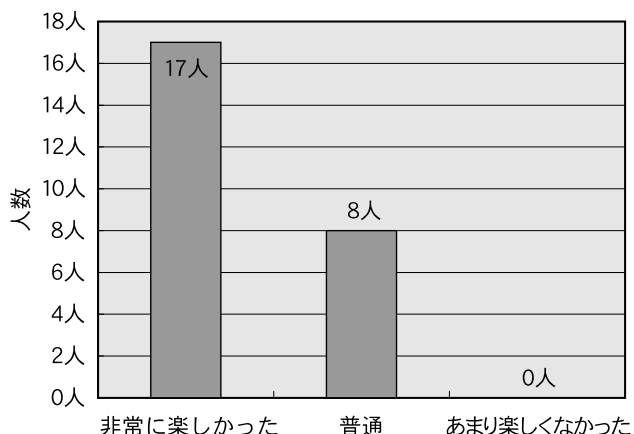
「この授業の悪い点」に関して付け加えると、受講生の1人はその批判意見を「非常に楽しかったのですが」と前置きして述べ、もう1人は「楽しすぎる。」ことを欠点としてあげている。特に2番目の受講生の意見は私の授業に対する、いわばironic complimentとして素直に受け止めたい。授業が楽しいことは、決して悪いことではなく、むしろ学習環境としては望ましいことである。

質問3、4、5では、15回の授業の結果、受講生の「話す力」「聞く力」「書く力」がそれぞれのどの程度上達したかを尋ねた。「話す力」が「かなり上達した」が0人、「少し上達した」が19人、「ほとんど変わらない」が6人、「聞く力」が「かなり上達した」が2人、「少し上達した」が19人、「ほとんど変わらない」が4人、「書く力」が「かなり上達した」が1人、「少し上達した」が19人、「ほとんど変わらない」が5人だった。3項目全部で25人中、76%に当たる19人が「少し上達した」と回答した。また、少数ではあるが、「聞く力」で2人が「かなり上達した」と回答し、

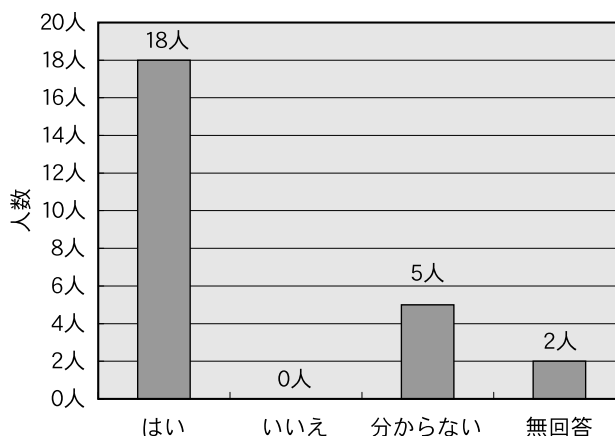
7. 英英辞典を使った練習は:(1)役立ったか



7. 英英辞典を使った練習は:(2)楽しかったか



8. 英英辞典をこれからも使い続けるか

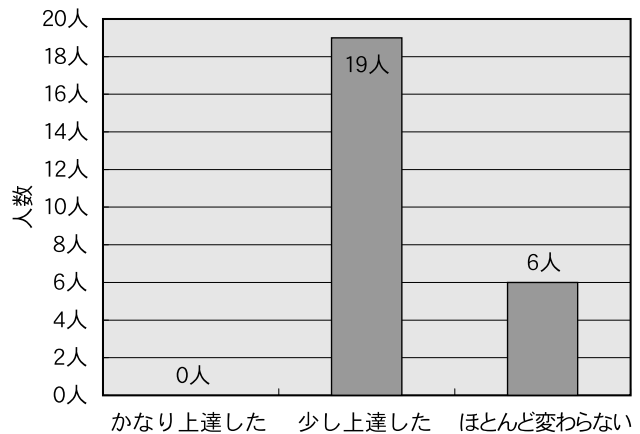


「書く力」で1人が「かなり上達した」と回答した。どのくらい上達するかは、個々人の動機付け、練習量等諸々の要因が関係してくるが、全体としては、受講生の英語能力の modest improvement が図られたようだった。私の授業で体験したことが、それぞれの受講生の今後の英語習得の出発点となれば幸いである。

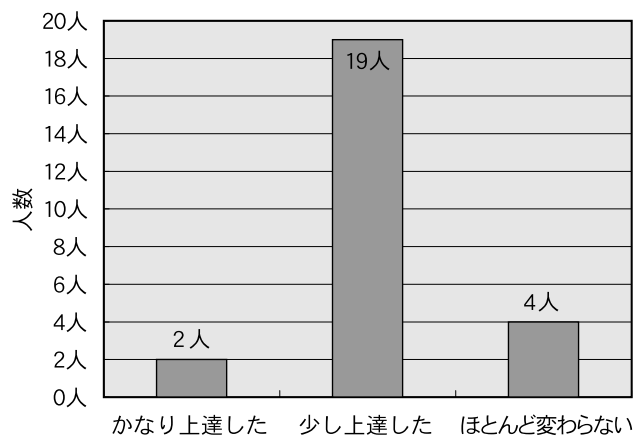
6. 私の授業の基本姿勢

私の授業は shocking なものだったかも知れない。というのは、私はこの授業であまり教へなかつたからだ。私が成し得たことは、受講生にそれぞれの考え・感情をあくまでも自由に英語で語らせ、また自由に英語で表現させることだった。何を話しても、何を書いても自由であった。英語使用上の間違いはあまり気にする必要はなかった。彼らは教師である私から何か知識を得るのではなく、自ら学び、互いから学び、また教えあった。‘One of the quickest ways to learn is to have to teach.’¹⁰⁾であり、‘students can provide useful feedback to one another’¹¹⁾ということ教師はもっと知るべきかも知れないし、学習者の能力をもっと信頼すべきかも知れない。その意味で、私の役割は知識の伝達者としてのそれではなく、むしろ学習者が自らの英語学習において自立できるように支援し、手助けする facilitator としてのそれであった。Little は、‘wherever systems of formal learning put a premium on the development of critical thinking and independence of mind, learner autonomy is at least an implicit educational goal’ と言い、洋の東西を問わず、学習者の ‘self-knowledge, self-reliance and self-determination’¹²⁾を育てることが教育の目的であることを明らかにしている。私達の教育活動もそうでありたいと願う。以下は私の受講生の文章からの引用である。

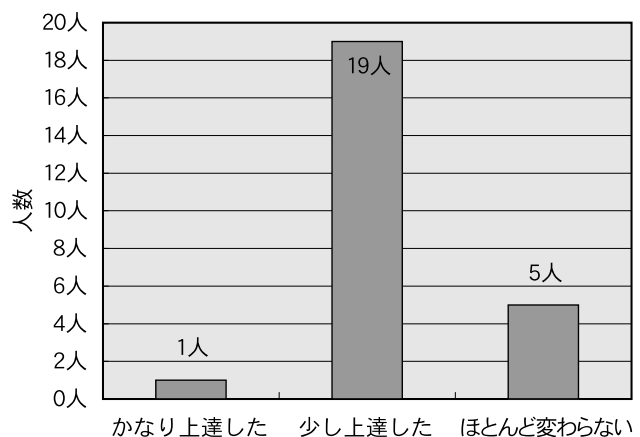
3. 話す力 : (1) 上達度



4. 聞く力 : (1) 上達度



5. 書く力 : (1) 上達度



In this class I want to learn about how interesting English is. This class has many times that we can communicate with classmates in English and write about ourselves in English freely. To improve our English is not studying for examination but studying with joy by many communications. This class can do it. This is what I have wanted to do for a long time.

* * *

I could study many things by reading my classmate's work. For example, some classmates used difficulty words which I haven't known well, others had very interesting opinions which I couldn't notice...To read each other's work improves our English and thinking too.

* * *

I learn many things of English from you[i.e. a classmate]¹³!! Thank you.

* * *

In this class I want to learn about communicate with other people in English.

English class always boring, because there weren't communicating. We were always writing, listening to the tapes.

But this class, we can express our opinion and communicate with other student, sometimes debate.

It is very difficult to express my opinion in English, but I think it is interesting.

* * *

I always worry about mistakes in English classes before. But this class is defferent from them. Now, I'm poor English writer too. But I can enjoy writing.

* * *

I think reading each other's work is very important in English class. Reading other students opinions, I'm getting a lot of thing. I get it's fun, so I enjoy it.

これらの文章の文法・綴りの間違いを探し始めたら、たくさんあるだろうし、パラグラフの構成の仕方も稚拙な場合があり、それらのことに眉をひそめる英語教師も多いことと思う。しかしそれらの間違い・不十分さの間から垣間見えるものは、自分の考え・感情を自由に、そして正直に表現している自立した受講生である。ある受講生は 'English class always boring' と書き、また他のものは、 'To improve our English is not studying for examination but studying with joy by many communications.' と言い、どのようにしたら英語を上達できるかを良く知っていることが分かる。Perhaps s/he knows that far better than some of us English teachers! 同じ受講生は、 'This is what I have wanted to do for a long time.' と、「読んで訳す」以外の方法で英語を学べる喜びの表現で文章を結んでいる。彼らの文章は 'want to learn' 'freely' 'interesting' 'enjoy' 'fun' 等々の肯定的な喜びのことばで溢れ、積極的に互いから学ぶことの有効性の自覚 ('I learn many things of English from you!! Thank you.') で満ち満ちている。これこそ正に英語学習に自由の発露を見出した学習者の姿ではないだろうか。

7. おわりに

私の授業は、受講生の実践的英語運用能力を高めるための授業改良の一環として行われた。英語をその本来の機能である意思伝達のための言語として尊重し、授業はすべて英語で行い、そのことで受講生に、英語の授業には「正確に読んで訳す」こと以外にも方法があることを提示できたと思う。15回という限られた回数であり不十分ではあったが、この彼らの体験が、「英語を英語のまま正確に読んで、理解」し、「英語で考えたことを英語で語り、書き表す」彼らの将来の能力に繋がれば幸いである。私の授業の中で、ほとんどの受講生は、「英語はつまらない」と言わなくなった。むしろ、彼らは嬉々として、眠くなることもなく、とにかく騒がしく、不完全な英語が始終教室内を飛び交っていた。そのような経験から、彼らは不完全な英語でも十分に意思疎通ができることを体得した。それは話すことにおいても、書くことにおいても然りである。もちろん英語での意思疎通は、彼らにとって容易なことではなかったと思う。だが、容易でないからこそいいのだ。日本の英語教育では今まで日本語を介在させ過ぎ、容易

なことはかりし続けてきたからこそ、英語で意思疎通ができない学習者が量産し続けられてきたのだと思う。これに歯止めをかけるためにはどうしたらよいかと、英語教育関係学会員や英語教師は頭を痛めているが、解決策は意外と簡単かもしれない。「隗より始めよ」という諺があるが、まさにそれだと思う。学習者の実践的英語運用能力を高めたいのであるならば、まず英語教師自身が手本を示せば良い。実際に英語を使って意思疎通ができることを見せれば良い。その際、時として教師も英語使用上の間違いを犯すことを理解させれば良い。引用した受講生の文章に、‘English class always boring, because there weren’t communicating. We were always writing, listening to the tapes.’との記述があったが、英語教育の本質に関わる鋭い直感だと思う。カセットテープは実際の人と人とのinteractionの代わりにはなり得ない。彼らは英語学習に喜びを求めている。彼らは英語学習に自由を求めている。彼らの喜び、彼らの自由は、教師の喜びであり、教師の自由である。そのような喜びと自由を教室という場で実現することが、学習者の責任であり、教師の責任である。

注

- 1) Patsy M. Lightbown and Nina Spada, *How Languages are Learned*, rev. ed.(Oxford: Oxford UP, 1999)118.
- 2) Lightbown and Spada 118.
- 3) Lightbown and Spada 167.
- 4) Lightbown and Spada 167.
- 5) []内は本稿著者が補った。
- 6) Lightbown and Spada 168.
- 7) David Little, ‘Freedom to learn and compulsion to interact’, *Taking Control: Autonomy in Language Learning*, ed. R. Pemberton et. al.(Hong Kong: Hong Kong UP, 1996)203-218, 204, qtd. in Naoko Aoki and Richard C. Smith, ‘Learner autonomy in cultural context: the case of Japan’, *Learner Autonomy in Language Learning: Defining the Field and Effecting Change*, ed. Sara Cotterall and David Crabble(Frankfurt and Main: Peter Lang, 1999)19-27, 22.
- 8) Richard Grabbrielli and Joel Harris, *WRITE about it TALK about it*(Fukuoka: Intercom, Press 1996, 1998)iv.
- 9) Maria Kowal and Merrill Swain, ‘From semantic to syntactic processing: How can we promote it in the immersion classroom?’ *Immersion Education: International Perspectives*, ed. Robert Keith Johnson and Merrill Swain, The Cambridge Applied Linguistics Ser.(Cambridge: Cambridge UP, 1997)284-309, 292-3.
- 10) Brian Page, ed., *Letting Go Taking Hold: A guide to independent language learning by teachers for teachers*(London: CILT, 1992, 1996)51.
- 11) Kowal and Swain 306.
- 12) David Little, ‘Learner autonomy is more than a Western cultural construct’, *Learner Autonomy in Language Learning: Defining the Field and Effecting Change*, ed. Sara Cotterall and David Crabble(Frankfurt and Main: Peter Lang, 1999)11-18, 12.
- 13) []内は本稿著者が補った。

参考文献

- Aoki, Naoko, and Richard C. Smith. ‘Learner autonomy in cultural context: the case of Japan’. *Learner Autonomy in Language Learning: Defining the Field and Effecting Change*. Ed. Sara Cotterall and David Crabble. Frankfurt and Main: Peter Lang, 1990. 19-27.

- Grabbrielli, Richard, and Joel Harris. *WRITE about it TALK about it*. Fukuoka: Intercom Press, 1996, 1998.
- Kowal, Maria, and Merrill Swain. 'From semantic to syntactic processing: How can we promote it in the immersion classroom?'. *Immersion Education: International Perspectives*. Ed. Robert Keith Johnson and Merrill Swain. The Cambridge Applied Linguistics Ser. Cambridge: Cambridge UP, 1997. 284-309.
- Lightbown, Patsy M., and Nina Spada. *How Languages are Learned*. Rev. ed. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Little, David. 'Learner autonomy is more than a Western cultural construct'. *Learner Autonomy in Language Learning: Defining the Field and Effecting Change*. Ed. Sara Cotterall and David Crabbe. Frankfurt and Main: Peter Lang, 1990. 11-18.
- Page, Brian, ed. *Letting Go Taking Hold: A guide to independent language learning by teachers for teachers*. London: CILT, 1992, 1996.

参考資料：調査用紙

Questionnaire 21c. English III B

July 2005 HU

(今後の授業の参考にしたいと思いますので、ご協力ください。)

1. テキストについて：

- (1) 難易度： 簡単 適当 難解
- (2) 興味が持てる内容か： 面白い 普通 つまらない
- (3) [(2)で「面白い」と答えた人だけ]特に何が面白かったか：

- (4) [(2)で「つまらない」と答えた人だけ]特に何がつまらなかったか

2. 授業について：

- (1) 難易度： 簡単 適当 難解
- (2) 英語だけの授業は(複数選択可)：
- a. 非常にためになるので、続けて欲しい。
 - b. 時々分からないが、ためになるので続けて欲しい。
 - c. 半分くらいしか分からないが、ためになるので続けて欲しい。
 - d. ほとんど分からないが、ためになるので続けて欲しい。
 - e. 半分くらいしか分からないので、止めて欲しい。
 - f. ほとんど分からないので、止めて欲しい。

g . 先生の英語は難しすぎて、面白くない。

h . 先生の英語は簡単すぎて、面白くない。

その他の意見：

3 . 話す力は：

かなり上達した。 少し上達した。 ほとんど変わらない

4 . 聞く力は：

かなり上達した。 少し上達した。 ほとんど変わらない

5 . 書く力は：

かなり上達した。 少し上達した。 ほとんど変わらない

6 . Pair work/group work は：

(1) Speaking/listening の練習に：非常に役立った 普通 あまり役立たなかった

(2)楽しかったか： 非常に楽しかった 普通 あまり楽しくなかった

7 . 英英辞典を使った練習は：

(1)役立ったか： 非常に役立った 普通 あまり役立たなかった

(2)楽しかったか： 非常に楽しかった 普通 あまり楽しくなかった

8 . 英英辞典をこれからも使い続けるか： はい いいえ 分からない

9 . この授業の良い点(自由記述)：

10 . この授業の悪い点(自由記述)：